

由布院盆踊り

口説き本

二つ拍子

まかせ

左衛門

蹴出し

附 由布院盆唄・盆踊り口上

二つ拍子

そろうた アリヤ そろーたアよ 踊り子が揃うた

ヤレショードヅコイシヨ

秋の出穂(でほ)よりや まだ良く揃うた

アラ ヨイヤサノセエー エエ ヨイヤサノセ

山の アリヤ 谷だに 八重咲く花は

ヤレショードヅコイシヨ

人が通わにや 盛(さか)りもすまい

アラ ヨイヤサノセエー エエ ヨイヤサノセ

音頭エ アリヤ 取りましょ 仰せとあらば

ヤレショードヅコイシヨ

由布の山までエ 韶こうほどに

アラ ヨイヤサノセエー エエ ヨイヤサノセ

花は みやま霧島 由の岳山に

ヤレショードヅコイシヨ

乱れ咲いたら 心も躍る

アラ ヨイヤサノセエー エエ ヨイヤサノセ

あれは アリヤ 内の人 口説きは初め

ヤレショードヅコイシヨ

女口説くと 勝手が違う

アラ ヨイヤサノセエー エエ ヨイヤサノセ

私しや アリヤ 旅の者 お庭にや初め

ヤレショードヅコイシヨ

初め者なら 合うかは知れぬ

アラ ヨイヤサノセエー エエ ヨイヤサノセ

わしが アリヤ 想いは 由の岳山の

ヤレショードヅコイシヨ

朝の霧よりや まだまだ深い

アラ ヨイヤサノセエー エエ ヨイヤサノセ

盆が アリヤ 来たのに 踊らぬ人は
ヤレショ一 ドツコイシヨ

親の心が わからぬ人よ

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

切れた アリヤ 切れたよ 踊り子の綱が
ヤレショ一 ドツコイシヨ

腐れ綱よりや なよく切れた

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

山の アリヤ ツツジが ちらほら咲けば
ヤレショ一 ドツコイシヨ

どこで鳴くのか アレ ホトトギス

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

お前 アリヤ 百まで 儂しや九十九まで
ヤレショ一 ドツコイシヨ

共に白髪の 生えるまで

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

人は アリヤ 一代 名は末代よ

ヤレショ一 ドツコイシヨ

発ちて行くとも あと名を残せ

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

裸 アリヤ 電球が ちらちら光る

ヤレショ一 ドツコイシヨ

皆で踊ろう お盆の踊り

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

セミも アリヤ 浮かれて 踊りに合わす

ヤレショ一 ドツコイシヨ

しばし間は 暑さも忘れ

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

揃いの アリヤ 浴衣に 角帯しめて

ヤレショ一 ドツコイシヨ

太鼓はバチで バチは唄で

アラ ヨイヤサノセエ一 エエ ヨイヤサノセ

まかせ

ちよいとエー 切りかえ まかせがよかろ ソレ マカセ マカセ
 まかせこかせて ア ヘンチキドスコイ
 品(しな)よく揃うよ ドコイ ドコイ
 アーラ ソウジヤ ソウジヤ まかせがよかろ
 ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

まかせエー 踊りは どこからはやる ソレ マカセ マカセ
 まかせおどりは ア ヘンチキドスコイ
 お宇佐がもとよ ドコイ ドコイ
 アーラ ソウジヤ ソウジヤ お宇佐がもとよ
 ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

竹のエー 切り株 みかんの接ぎ穂 ソレ マカセ マカセ
 それがつながりや ア ヘンチキドスコイ
 枯れ木に花よ ドコイ ドコイ
 アーラ ソウジヤ ソウジヤ 枯れ木に花よ
 ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

今度エー 豊前の 宇佐八幡の ソレ マカセ マカセ
 五百年忌の ア ヘンチキドスコイ
 開帳がござる ドコイ ドコイ
 開帳ござれば 芝居もござる
 ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

那須のエー 与一と いう侍は ソレ

マカセ マカセ

背は小兵で ア ヘンチキドスコイ

マカセ マカセ

ござそぞうらえど ドコイ ドコイ

マカセ マカセ

天下取つての 弓引きやお上手

マカセ マカセ

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

タベエー 山香の 踊りを見たら ソレ

マカセ マカセ

オーコかたげち ア ヘンチキドスコイ

マカセ マカセ

鎌う腰いせいち ドコイ ドコイ

マカセ マカセ

踊る片手に 稗餅(ひえもち)こぶる

マカセ マカセ

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

こぶるエー 稗餅や パラ・パラあゆる ソレ マカセ マカセ

あゆる稗餅や ア ヘンチキドスコイ

蟻(いあり)が運ぶ ドコイ ドコイ

蟻そこのけ 踏み殺さるるど

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

盆のエー 十六日(んち) おばんかちいたら ソレ マカセ マカセ

上がれ茶を飲め ア ヘンチキドスコイ

やせ馬食えの ドコイ ドコイ

アーラ ソウジヤ ソウジヤ やせ馬食えの

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

わしがエー この村 お庭じや初め ソレ マカセ マカセ

初め者なら ア ヘンチキドスコイ

宜しく頼む ドコイ ドコイ

アーラ ソウジヤ ソウジヤ 宜しく頼む

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

山芋 挖るならア 井手ん脇行こうか ソレ マカセ マカセ

つるをたどれば ア ヘンチキドスコイ

草かき分けち ドコイ ドコイ

びや首なでなで 大きさ測る

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

掘ったエー 山芋 とろろで食おうか ソレ マカセ マカセ

すりこぎゴリゴリ ア ヘンチキドスコイ

手首がかゆい ドコイ ドコイ

食べた後から 口ばたかゆい

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

ところろエー 食べたら 腹太なつち ソレ マカセ マカセ

腹がグルグル ア ヘンチキドスコイ

屁をこきながら ドコイ ドコイ

瞼(まぶた)とろとろ 居眠りこくよ

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

春はエー 桜で 温泉まつり ソレ マカセ マカセ
しやもじ たてえち ア ヘンチキドスコイ マカセ

頬紅イつけち ドコイ ドコイ
踊る姿が コリヤ又ア おかし

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

夏はエー 湯布院の 七夕祭り ソレ マカセ マカセ
飲んで唄つて ア ヘンチキドスコイ

夜店も並ぶ ドコイ ドコイ

金魚ござれば 焼きイカもござる

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

蝉のエー 声聞きや かみなり様が ソレ マカセ マカセ

ゴロリピカピカ ア ヘンチキドスコイ

夕立降らす ドコイ ドコイ

夕立降らせば 朝顔伸びる

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

伸びるエー 朝顔 屋根まで届く ソレ マカセ マカセ

夏を彩る ア ヘンチキドスコイ

赤 青 ピンク ドコイ ドコイ

蜂も飛ぶ飛ぶ 暑さも忘する

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

庭のエー 藤棚 今年も下がる ソレ マカセ マカセ

下がる棚下 ア ヘンチキドスコイ

酒飲み交わす ドコイ ドコイ

飲めや唄えの 花見と行こうか

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

花見にや 欠かせぬ まかせがよから
まかせ音頭で ア ヘンチキドスコイ

何でもまかせ ドコイ ドコイ

飲んだ勘定は あなたにまかせ

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

段物 那須の与一

那須の与一と 云う武士(きむらい)は
積もるお歳や 十六歳で
背は小兵で ござ候えど
小兵ながらも 弓引きやお上手
弓は一手(ひとて)に 名は万世に
残し置かれた 処はいづこ

【合の手】
ソレ マカセ マカセ
ア ヘンチキドスコイ
ドコイ ドコイ
ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

四国さぬきは 屋島の沖で
源氏平家の おん戦いに
平家方では 沖なる舟に

的に扇を しるして通る
それは源氏を 侮る(あなどる)手だて
大将義経 それ聞くよりも

あれは源氏を 侮る(あなどる)手だて
あれを射落とす 味方はないか
そこで与一は 御前(ごぜん)に呼ばれ

与一あれ見よ 平家の者は
的に扇を しるして立てる
あれは我等を 侮る(あなどる)手だて

そなた一矢(ひとや)で あれ射落として
敵や味方に 見物させよ
与一答えて 御前を下がる

家へ帰りて 我が住む室で
上に緋緘(ひおどし) 稚児鎧(ちごよろい)着て
弓は重籠(しげとう) 切生(きりぶ)の矢にて
青の名馬に 五色(ごしき)の手綱(たづな)
波打ち際にと 早や乗り着ける
沖の舟をと 眺めて見れば

波は高くて ゆらゆら揺れて
的の扇が 定まりませぬ

そこで与一は 一心不乱

南無や八幡 那須明神よ
射させ給えと 心願かける
神の威徳か 与一の運か

風も治まり 波小さくて
的の扇が 定まりまする
そこで与一は 神礼すまし

弓は重籐(しげとう) 切生(きりふ)の矢にて
要元(かなめもと)より 三寸下に
ねらい定めて はっしと放つ

放つ矢すじは 虚空を切つて
要元をば はっしと射切る
切れた扇は ひらひらひらと

波の間に 舞い落ちまする
そこで平家は 船端(ふなばた) 叱く
源氏方では 箕(えびら)を鳴らす

弓は一手(ひとつ)に 名は万世に
那須の与一の まず物語り
千秋万歳 まずこれ迄よ

※ 噙い出しの語尾に「エー」を付けて、調子を整えても良い

【合の手】

ソレ マカセ マカセ

ア ヘンチキドスコイ

ドコイ ドコイ

ヤート ハリハリ チョウノエイエイ

段物(だんもの) ॥

一般には、一貫した筋のない寄せ集めの小唄を端物(はもの)と
いうのに対して、一段として筋のまとまつた長篇音曲を段物という。

重籐(しげとう)の弓 ॥

弓の束(つか)を黒漆塗りにし、その上を籐(とう)で強く巻いたもの。
大将などの持つ弓で、籐の巻き方などによって多くの種類がある。
正式には握り下に二十八か所、握り上に三十六か所巻く。

切生(切斑・きりふ)の矢 ॥

鷲(わし)の尾羽を用いた矢羽根で、白と黒のまだらがあるもの。
まだらの大小や濃度によって大切生・小切生・薄切生など多くの
呼び名がある。

簾(えびら) ॥

矢を入れて背中に負う矢具の一種。平安時代以降武家が用いた。

左衛門

ちよいと切りかえて 左衛門を コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

左衛門様なら 品(しな)がよい

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

朝には朝霧 夜は夜霧 コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

どちらも霧には 変わらせぬ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

霧は霧でも キリがない コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

酒飲みや飲ませて キリがない

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

裏の松山 セミが鳴く コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

裏の畑で ポチが鳴く

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

向かいのお山で 猪(しし)が鳴く コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

寒さで泣くのか 妻呼ぶか

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

寒さじや鳴かぬ 妻呼ばぬ コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

明日はお山の お猪狩り

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

舞います 舞います 舞います コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

お空にやツバメさんが 舞い遊ぶ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

お国の自慢を ちよいと問えば コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

由布岳 温泉 金鱗湖

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

水の底から お湯が湧く コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

朝霧 深し 金鱗湖

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

霧の定めか 消えてゆく コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

朝の光りに 包まれて

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

春はサクラに 菜の花が コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

秋はコスモス 山紅葉(やまもみじ)

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

蹄(ひづめ)の音も 軽やかに コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

旅の想い出 辻馬車よ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

太鼓の響きが 木靈(こだま)する コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

源流太鼓が 胸を打つ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

狭霧台(さぎりだい)より 眺むれば コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

田毎(たごと)に写す 月の影

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

雪が舞い降る 山里の コラサノサ

ア ヨイショ ヨイショ

真白(ましろ)に輝く 由布の峰

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

早野勘平さんの猪(しし)撃ちにや ≪ア ヨイショ ≪

片手に蓑(みの)持ち鉄砲持ち

三尺火縄を四つに折り

一の谷越ゆれど猪やおらぬ

二の谷越ゆれど猪やおらぬ

三山峠の真ん中で

あゝあな嬉しや猪が鳴く

猪かと思つて撃つたなら

南無三しもうた旅の方

書き付けないかとふところに

探し当てる縞(しま)財布

縞の財布にや金十両

今のが金なら百万両

死んだあなたにやいらぬ金

私にやなくてはならぬ金

しばし モッコラサ 間は貸しなされ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

一かけ二かけて三をかけ ≪ア ヨイショ ≪

四かけて五かけて橋をかけ

橋の欄干(らんかん)腰をかけ

遙か向こうを眺むれば

十七・八の姉さんが

片手に花持ち線香持ち

姉さん 姉さん どこ行くの

私は九州鹿児島の

西郷隆盛の娘です

明治十年三月に

切腹なされた父母の

お墓 モッコラサ 参りにまいります

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

簾笥(たんす) 長持ち 鋸箱(はさみばこ) ≪ア ヨイショ≫

これだけ持たせてやるからにや
決して出戻りするじやない

とと様 かか様 そりや無理じや

由布岳曇れば風とやら

山下曇れば雨とやら

千石積んだ舟でさえ

風 モツコラサ 吹きようじや舞い戻る
ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

春風 そよ風 迷い風 ≪ア ヨイショ≫

風の吹きようじや後ろ向く
とかくこの世は風見鶏

つむじ風 すきま風 あおり風

引いちやいけない流行風邪(はやりかぜ)
財布は モツコラサ 一年中、空つ風

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

朝の助こそ清水(きよみづ)の ≪ア ヨイショ≫

觀音様の申し子で

江戸に飛脚で上る(のぼる)道

柳町にて日が暮れる

角のお茶屋に宿をとる

宿の娘におかねさん

おかねさんとて十五歳

まだ振り袖の丸額(まるびたい)
ちらと見たのが恋となる

一夜(ひとよ)のお宿が縁となる
想いかわすな かわさじと

かわすまいとの文を書く
眉の毛切りて筆となし

小指を切りて墨となす
明くれば モツコラサ 朝さん発つて行く

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

丸額(まるびたい) 前髪の生え際を丸く剃った額。
年少の男女の額の形。

大分川の源流は ≪ア ヨイショ≫

由布の盆地の金鱗湖

ホテイアオイの湖面には

時たま跳ねる豊後鯛

波に揺らめく豊後富士

ザリガニ獲りの子供達

湖畔にや浴衣の二人連れ

シオカラトンボが目を回す

ツバメも低く水を打つ

ツバメ モツコラサ 飛びようじや 舞い落ちる

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

由布の盆地に霧をかけ ≪ア ヨイショ≫

大工は屋根にハシゴ掛け

公園 ベンチに腰を掛け

高松地蔵に願を掛け

家にや火災の保険掛け

軒にやツバメが巣を掛けて

親父は子供に期待掛け

ストーブ、トロトロやかん掛け

子供は算数九九を掛け

これ モツコラサ 毎日が命がけ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

もう一度昔に戻りたい ≪ア ヨイショ≫

人は誰でもそう思う

もう一度始めからやり直したい

素敵な恋でもしてみたい

ほかの仕事をしてみたい

みんないつでもそう思う

だけど昔に戻れない

二度と元には戻れない

これ モツコラサ 人生は一度だけ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

お盆にや兄弟里帰り ≪ア ヨイショ≫

ご先祖様も里帰り

あんたが好きな焼酎と
ホオズキ供えちお迎えし
ローソクともせば想い出す

あんたの顔が目に浮かぶ

先祖の残した教訓は

今も心に残つちよる

今夜は楽しく晩飯を

ソーメンすすつちスイカ食べ

子孫の繁栄ここにあれ

これ モツコラサ 財産はまかしなれ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

今年は家を建てましよか ≪ア ヨイショ≫

思い立つたが百年目

裏の山から金が出ち

馬券に、車券に、宝くじ

やる事なす事大当たり

一攫千金、夢に見ち

札束つかんで投げ上ち

万歳したら目が覚めた

これ モツコラサ 寝言じや ご免なれ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

驚き、桃の木、山椒の木 ≪ア ヨイショ≫

桃栗三年、柿八年

柚子の馬鹿たれ十八年

孝行息子は二十年

住宅ローンは三十年

これ モツコラサ 寝言じや ご免なれ

ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

薩摩隼人は焼酎党 ≪ア ヨイショ ≪

一口飲めば、赤くなる
二口飲めば、良い心地
三口飲めば、歌が出て
四口飲めば、踊り出す
五口飲めば、愚痴が出る
六口飲めば、酔い潰れ
七口飲めば、七癖が
八口飲めば、吐き気する
九口飲めば、救急車
十口飲めば、倒産だ
これ モッコラサ 焼酎は効き過ぎる
ソレーヤ ソレーヤ ヤトヤンソレサ

私が入れこを入れましよか
思つた時が入りどき

私が入れこを入れましよか
今年も新曲できました

蹴 出 し

やれ 皆さん 蹴出しど行こか
サーサイサイ
しばし 間の 音頭取りやしましよ
ヤーレショドツコイショ

わしは この村 お庭じや初め
サーサイサイ
初め 者なら 合うかは知らぬ
ヤーレショドツコイショ

会えば 義経 千本桜

サーサイサイ

会わにや 高野(こうや)の石童丸(いしじうまる)よ
ヤーレショドツコイショ

こんな 事言うちや 文句にやならぬ
サーサイサイ

何か 見つけて 口説きにしましよ
ヤーレショドツコイショ

蹴裂(けさき) 権現(ごんげん) 山 蹴破りて

サーサイサイ

水を 流して 田畠をつくり
ヤーレショドツコイショ

五穀 豊穣 由布院出来た

サーサイサイ

谷の 底から 温泉湧いて
ヤーレショドツコイショ

お湯に 浸かれば 病(やまい)も治る

サーサイサイ

汗を 流して 疲れも取れる
ヤーレショドツコイショ

水虫 汗もも たちまち治る

サイイサイ

恋の 病(やまい)は ちよつと難しい

ヤーレショドツコイショ

今夜 皆さん ようこそ御座れ

サイイサイ

浴衣(ゆかた) 摺えち 皆出ち踊ろ

ヤーレショドツコイショ

老いも 若いも 足高こ上げち

サイイサイ

下駄の 音も カラコロ云うち

ヤーレショドツコイショ

音頭 取るのも 声張り上げち

サイイサイ

夜は まだまだ これからですよ

ヤーレショドツコイショ

彼氏も 彼女も 足取り軽く

サイイサイ

風切る 衿(たもと)も ちよつと恥ずかしい

ヤーレショドツコイショ

踊る浴衣(ゆかた)の 姿が眩(まぶ)し

サイイサイ

可愛いあの娘(こ)が チヨイと気に掛かる

ヤーレショドツコイショ

母ちゃん 子種が またまた出来る

サイイサイ

家族 円満 言う事なじじや

ヤーレショドツコイショ

鎮西為朝(ちんぜいためとも) 伝説残る

サイイサイ

由布のお山に 弓張月(ゆみはりづき)よ

ヤーレショドツコイショ

弓張月 //

上弦又は下弦の月
弓に弦(つる)を張
つた形に似て いる
ところから。

青の洞門 穿(うが)ちて通す

サーサイサイ

禪海 得度(とくど)の 興禪院よ

ヤーレショドツコイシヨ

御幸橋(みゆきばし)から 眺めて見れば

サーサイサイ

桜 菜の花 由布岳 映(は)える

ヤーレショドツコイシヨ

山の縁に 夕立降つて

サーサイサイ

青い田圃(たんぼ)に 涼風(すずかぜ)渡る

ヤーレショドツコイシヨ

斎藤実盛(さいとうさねもり) ウンカとなりて

サーサイサイ

稻を荒らして 苦しめまする

ヤーレショドツコイシヨ

蝗(こう)攘(じょう)祭(さい)にて 魂(たましい)鎮(しず)め

サーサイサイ

松明(たいまつ)灯(とも)して 虫追いまつり

ヤーレショドツコイシヨ

由布の盆地に 花火が上がる

サーサイサイ

菊や柳に 色とりどりに
ヤーレショドツコイシヨ

豊年万作 稲穂が実り

サーサイサイ

栗や柿の実 枝に溢(あふ)れ
ヤーレショドツコイシヨ

由布のお山に 初雪降れば

サーサイサイ

川に 渡りの水鳥遊ぶ
ヤーレショドツコイシヨ

得度(とくど) ॥

剃髪して仏門に入ること。
出家。

斎藤実盛 ॥

源平の戦いの際、乗つて
いた馬が稻につまずいた
ために源氏の兵に討たれ
てしまい、その怨念が害
虫となつて、稻を食い荒
らしたという言い伝えが
ある。
蝗(こう)攘(じょう)祭(さい)は実盛の靈を慰め
て豊作を祈る、虫追いの
行事である。

ここに過ぎにし その物語
国は山陰 その名も高し

武家の家老にや 一子の伴(いっしのせがれ)
平井権八直則(ひらいごんぱちなおのり)こそは

犬のけんかが 遺恨となりて
同じ家中の本庄(ほんじょう)氏(うじ)を

討ちて立ち退き 東(あづま)へ下る
下る道にて 桑名の渡し

僅かばかりの 船賃ゆえに
あまた船頭に 取り囲まれて

すでに命の 危なき処
救い助けし 一人の御仁(ごじん)

その家(や) 家中に 美人がござる
その夜 権八 寝間へと忍ぶ

もしや若様 侍様よ
知つて泊まるか 知らいであるか

この家(や)主人は 盗賊なるぞ
わしも 元々 三河の国で

三河国でも 長者の娘
去年暮れ方 この家にやとられ

永(なが)の月日を 涙で暮らす
情(じょう)じや 情け(なさけ)じや
御情(ごじょう)じや程に

【合の手】

サイイサイ
ヤーレショドツコインショ

一子の伴(いっしのせがれ) ||

①ひとりの子供。
②多くの子の中の一人。特に嫡子

【 平井権八・小紫口説き (部分) 】

花のお江戸の その傍らに
しても珍し 身の上話し 【心中話し】とも唄う】

【合の手】

サイイサイ
ヤーレショドツコイシヨ

ここは四谷の 新宿町に
紺の暖簾(のれん)にや 桔梗(ききょう)の紋よ

ここに名高き 橋本屋とて
あまた女郎衆の あるその中で

御職(おしょく)女郎の 白糸(しらいと)こそは
歳は十九で 当世(とうせい)育ち

愛嬌(あいきょう)よければ 皆々様が
我も我もと 名指して上る

分けてお客様は どなたと問えば
春は花咲く 青山へんど

鈴木主水(すずきもんじ)と 云う侍よ
女房持ちにて 二人の子供

二人子供の そのある中に
日にち毎日 姫買いばかり

見るに見かねた 女房のお安
わしが邪険で 言うのじやないが

二人子供は だてには持たぬ
やめてくだんせ 女郎買いばかり

金のなる木は 持ち合わせまい
言えば主水は 腹立ちまぎれ

【鈴木主水・白糸口説き(部分)】

御職女郎(おしょくじょろう) ॥

その娼家の中で最上位の遊女。
または、最も売れっ子の遊女のこと。

蹴出し

盆踊り太鼓伴奏 基本型

① カ カ カ ドン ドン

□ □ □ ◎ ◎

② カ カ カ ドン カッ カ カ ドン

□ □ □ ◎ □ー□ □ ◎

③ ド カ カ カ ドン ドン カッ カ カ ドン

○ □ □ □ ◎ ◎ □ー□ □ ◎

- ・上記 ① ② ③ を組合せる
- ・伴奏者独自の太鼓奏法も可
- ・拍子は「裏打ち」を基本とする
- ・口説き演者の間(ま)や節回しに合わせる

声が出ません 蚊の鳴く程も
誰か どなたか どなたか 誰か
しばし 間の 声継ぎ頼む
しばし 間の 音頭取り頼む

先(せん)の太夫(たゆう)さん 長々(ながなが)苦勞
ご苦勞様なら お茶など上がり
お茶が嫌なら 菓子など召され
菓子が嫌なら 十七(じゅうしち)八(やつ)の
姉さん手枕(てくらし) こりや又どうか
こんなことでは 文句にやならんと
何か見つけて 文句にしましょ
しばし 代わって 音頭取りしましょ

やれ ヨイトコセで 蹴出しを拾(ひろ)た
しばし 代わって 音頭取りしましょ

どこかの どなたか どなたか誰か
しばし 間の 声継ぎ頼む

【合の手】
サイイサイ
ヤーレショドツコイショ

由布院盆唄

中谷健太郎
佐藤清隆 唄作

エンヤラヤノヤーノ ドツコイシヨ コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

一、揃うた揃うたよ 踊り子が揃うた 揃うた手拍子 足拍子
揃うた手拍子 足拍子 コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

二、わしが在所は 猪の瀬戸越えて 米の花咲く お湯どころ
米の花咲く お湯どころ コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

三、昨日(き)によ(う)生まれた ベベコの鼻に 蝶が飛んじ来ち 吸いついた
蝶が飛んじ来ち 吸いついた コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

四、露を払うち 朝草切れば 由布のお山に 陽が昇る
由布のお山に 陽が昇る コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

五、おかめ、ひよつとこ いらん世話やくな めんめ同志が 好いた仲
めんめ同志が 好いた仲 コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

六、盆の十五夜 馬屋(まや)んつし寝たら おどもお前も 藁(わら)だらけ
おどもお前も 藁だらけ コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

七、おばん飯炊け やせ馬食わせ 年に一度の 盆踊り
年に一度の 盆踊り コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

八、酒の四、五升じや まだまだ酔わぬ 六所(升)様とは おりがこつ
六所様とは おりがこつ コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

九、お庄屋が見込んだ 自慢の嫁御 飯も食わんじ 田を植えた
飯も食わんじ 田を植えた コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

十、阿蘇は坪先(つぼさき) 九重(くじゅう)は納戸 城島別府は 座敷内(うち)
城島別府は 座敷内 コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

エンヤラヤノヤーノ ドツコイシヨ コラヤノヤーアノ ドツコイシヨ

東石松 盆踊り 口上

◎ ◎
南無釈迦牟尼佛（なむ しゃかむにぶつ）

南無阿弥陀佛（なむ あみだぶつ）

南無十方一切諸佛（なむ じつぽう いつさい しょぶつ）◎

盆の踊りの始りを 盂蘭盆教（うらばんきょう）を紐解いて 語り聴かせん物語 ◎

昔 釈迦のおん弟子 目連尊者（もくれんそんじや） ◎

おん母 永く病（やまい）に臥したまい ◎

名医集（つど）いて 医術を尽くせど 遂に亡逝去（せいきょ）遊ばさる ◎

神通（じんづう）第一 目連尊者 天眼通（てんげんづう）にて 亡き母見れば ◎
前世の罪の深くして 餓鬼道地獄（がきどうじごく）に落ちたまい
骨皮ばかりの姿なり ◎

目連深く哀しみて 母の苦しみ救わんと 鉢に飯（めし）盛り持ちゆかば ◎
食する前に燃え上がり 幾度もたちまち 火炭（ひすみ）となつて

遂に（ついに）食すること得ず ◎

目連 驚き 泣き悲しめども 如何（いかん）とも なす術（すべ）なし ◎

馳（は）せ還りてお釈迦様に 母救済の法を請（こ）う ◎

佛の曰（いわ）く 汝の母は罪の根深く 汝一人の力をもつては成し難し ◎
聖者の道を行く者の徳は 海の如く深くて広い ◎

安居（あんご）修行に集まれる 数多（あまた）の僧侶に布施をなし ◎

十方衆僧（しゅうそう）の威神（いしん）の力をもつて

すなわち解脱（げだつ）を願うべし ◎

過去七生（しちしきょう）の父母（ちちはは）も 天上界に自在に生まれ
無限の快樂を得ん ◎

目連 佛の諭し（きとし）に従つて 世界の高僧に布施をなす ◎

この時 目連その母 たちまち一劫（いちごう）餓鬼の苦を脱することを得たり ◎

目連尊者喜んで ついに手の舞い 足の踏むところを知らず ◎
多くの大菩薩衆 衆僧 皆大いに歡喜し 舞い踊る これ盆踊りの始めなり ◎

先祖諸靈追善の 供養の一夜（ひとよ）
いざいざ踊り始めなん いざいざ踊り始めなん ◎ ◎

◎ ॥ 錚・太鼓

(参考)

義経千本桜 (あらすじ) ॥

歌舞伎 義経千本桜 四段目 川連法眼館（かわつら ほうげん やかた）の段
川連法眼の館に匿われている義経のもとに佐藤忠信が参上する。ところが伏見稻荷で静御前と初音の鼓を預けたことを知らない忠信。不信を抱く義経。そこへ静御前とお供をしてきた忠信が現れる。真偽を確かめるために、義経は静御前に鼓を打つように言う。静御前は鼓を打ち、現れた忠信に正体が狐であることを白状させる。昔、干ばつの時に雨乞いのため、千年生きながらえていたという雄狐と雌狐を狩り出し、その皮で初音の鼓をつくり、鼓を打つて雨を降らせたという。忠信に化けた狐は鼓にされた狐夫婦の子で、親を慕い、忠信に化けて鼓を持つ静御前に仕えてきたという。義経は親子兄弟の縁の薄い我が身をかえりみて子狐に同情する。親孝行したいという子狐の気持ちに感動して、これまで静御前を守ってきた功により、子狐に源九郎の名とともに初音の鼓を与える。

源九郎狐の喜びはこの上なく、お礼に義経に危機が迫っていることを告げて、鼓とともに姿を消す。やがて山科の荒法師・法橋坊たちが館に攻めてくるが、源九郎狐の幻術によって制圧される。

高野の石童丸 (あらすじ) ॥

平安末期、九州筑前の領主、加藤左衛門重氏は、諸行無常を憂い妻子を置いて旅に出る。程なくして生まれた石童丸は父を慕い、高野山にいるとの風の便りに母を連れて向かうが、靈峰は女人禁制の時代、母から父の面立ちを聞き、麓へ母を置きひとり山へ登る。折しも刈萱道心と名を改め僧となつた父とすれ違う。そうとは知らず石童丸は、父を探している、と刈萱道心に告げる。刈萱道心は石童丸が腰に差す脇差が、かつて自分が身に着けていたものと気付き驚くが、何千人の僧がいるこの山で目当ての人を探すなら、名前を紙に書いて貼つてはどうか、と諭す。そして石童丸が語る名に、我が子と悟った刈萱道心は涙を流す。それを見た石童丸は母に聞いた父の面立ちに似ている道心に、父ならば名乗つてくれとすがるが、仏に身を捧げた道心は名乗るに名乗れない。麓で待つ母は、旅の疲れで帰らぬ人に。国へ帰った石童丸は姉も亡くなつていたと知り悲嘆に暮れ、また高野山に戻り、刈萱道心を父と確信しながら師と仰ぎ、二人は親子と名乗り合うことのないまま、共に修行を続けたのだ。

歌舞伎 仮名手本忠臣蔵

主君・判官の大事に、恋人おかると逢い引きしていた早野勘平の物語。おかるの実家で猶人となつていた勘平は、敵討ちの噂を知り大金が必要だつた。おかるの父は娘を祇園に売り、金を持って夜道を帰る途中、山賊に襲われて財布を奪われる。猪狩りをしていた勘平が闇の中で撃つたはずの死骸に触れ驚いたもの、懐の財布に気付き持ち帰る。帰宅した勘平は、例の財布は遊女屋が舅に渡したものと知り、舅を殺したと思い込む。姑や元同僚から責められ勘平は腹を切る。そこに舅の死因は刀傷と判明。街道で撃たれて死んでいた山賊こそ真犯人で、勘平は舅の敵を討つたことが明らかとなり、判官の敵討ちに参加する連判状に血判を許され息絶える。

平井権八・小紫口説き（あらすじ） ॥

平井権八は、江戸時代前期に実在した日本の武士である。講談・淨瑠璃・歌舞伎等の世界では、白井権八（しらい ごんぱち）として知られる。因幡国鳥取藩士であつたが、数え十八歳の秋、父・正右衛門の同僚である本庄助太夫を斬殺して、江戸へ逃亡した。新吉原の三浦屋の遊女・小紫と昵懇となる。やがて困窮し、辻斬り、強盗、殺人を犯し、百三十人もの人を殺し、金品を奪つたとされる。権八は、目黒不動瀧泉寺付近にあつたとされる普化宗東昌寺（現在廃寺）に匿われ、尺八を修めて虚無僧になり、虚無僧姿で郷里・鳥取を訪れたが、すでに父母が死去していたことから、自首したとされる。

延宝七年十一月三日、品川・鈴ヶ森刑場で刑死した。享年二十五歳。小紫は刑死の報を受け、東昌寺の墓前で自害したとされる。同寺に「比翼塚」がつくられたが、同寺が廃寺となつたため移転し、目黒不動瀧泉寺に現存している。

東（あづま）へ下る ॥

平安時代に京都の貴族は、関東を「あづま」（東）と称した。下るとは、都から地方へ行くことを云う。

昔、ヤマトタケルノミコトが、東国征伐に三浦半島から舟で房総に行く途中、荒れる海に困っていた。すると、妻のオトタチバナヒメは、私が海神の御心を慰めましようと海に身を投げた。すると不思議と海は静まり房総に渡ることができた。征伐後、足柄峠に立ち三浦半島を望んで「吾妻（あづま）はや」と妻がもう居ないと嘆いたことに由来して、「東」と書いて「あづま」と称される様になつた。

鈴木主水・白糸口説き（あらすじ）||

処は四谷の新宿にある評判の女郎屋、橋本屋の白糸に入れあげた鈴木主水。腹に据えかねた奥方、お安は三歳と五歳の子どもを連れて橋本屋へ押しかけ、白糸に、夫が来たら帰るよう言い聞かせてほしいと頼み込む。主水が妻子持ちと知らなかつた白糸はその願いに胸を打たれ主水に忠言をするが、聞き入れる訳もなかつた。そのうち身持ちの悪さがお殿様の知るところとなり、主水は仕官を放免され、武士の妻であるお安は世間体を憂い自害してしまう。さすがの主水もこれに嘆き、菩提を弔うが、仕官を放免されたことに絶望し、戒名を持つて白糸を訪ねる。情け深い白糸はお安の死を悔いて自害する。ついに主水も二人の後を追つて自害し果てた。哀れ残されたのは二人の幼子だった。

滝沢馬琴著「椿説弓張月（ちんぜいゆみはりづき）」||

弓を取つては鬼神の冴えを見せ「海内無双（かいだいむそう）」と称された、鎮西源八郎為朝（ちんぜい みなもとのはちろうためとも）の物語。由布岳を舞台に、大蛇退治などの武勇伝が前半に述べられている。徳川家康から奥平忠昌が拝領した「白鳥の槍」は、為朝の鎌（やじり）を槍に仕立てたものと云われ、現在は中津城に展示されている。

菊池 寛著「恩讐（おんしゆう）の彼方（かなた）に」||

耶馬溪「青の洞門」を開通した禪海和尚が、彼を親の敵と狙う中川実之助と恩讐を超えて手を取り合うのを結末とした小説。禪海は湯布院の興禪院で得度し僧となつたと伝わる。羅漢寺（耶馬溪）のふもとに禪海堂という堂宇があり、禪海使用のノミなどが置かれている。

安居（あんご）修行 ||

雨期に活発になる昆虫、小動物に対する無用な殺生を防ぐため、個々に活動していた僧が、一定期間ひととところに籠つて修行すること。

本誌に未掲載の
「段物 口説き」
は、東石松区
ホームページを
ご覧ください。

東石松区 検索

平成三十一年一月 初版

令和六年八月 加筆改訂
令和七年十二月 追録改訂